

「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」及び 「仕事と生活の調和推進のための行動指針」の策定

「憲章」:国民的な取組の大きな方向性を提示

「行動指針」:企業や働く者等の効果的取組、国や地方公共団体の施策の方針

【「憲章」と「行動指針」の意義】

【従来】 働き方の見直しは、個々の企業の取組に依存 一部の先進的な取組にとどまり、社会的な広がりや欠けていた

【今般】 政府や有識者に加え、経済界、労働界及び地方のトップで協議、合意 社会全体を動かす大きな契機に

【働き方の二極化】

企業間競争の激化、経済低迷や産業構造の変化 正社員以外の労働者が大幅に増加、正社員の労働時間の高止まり

【共働き世帯の増加と変わらない働き方・役割分担意識】

【かつて】 夫が働き、妻が専業主婦として家庭や地域で役割を担うという姿が一般的

【現在】 女性の社会参加等により、勤労者世帯の過半数が共働き世帯。働き方や子育て支援などの社会的基盤は従来のまま。
職場や家庭、地域では、男女の固定的な役割分担意識が残存。



【仕事と生活の間で問題を抱える人の増加】

正社員以外の働き方の増加 経済的に自立できない層

長時間労働 「心身の疲労」「家族の団らんを持たない層」

働き方の選択肢の制約 仕事と子育ての両立の難しさ



【少子化対策や労働力確保が社会全体の課題に】

結婚や子育てに関する人々の希望を実現しにくいものにし、急速な少子化の要因に

働き方の選択肢が限定、女性や高齢者等の多様な人材を活かすことができない



個人の生き方や人生の段階に応じて多様な働き方の選択を可能にする必要

働き方の見直しが、生産性の向上や競争力の強化に = 「明日への投資」

仕事と生活の調和が実現した社会の姿

国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会

就労による経済的自立が可能な社会

経済的自立を必要とする者とりわけ若者がいきいきと働くことができ、かつ、経済的に自立可能な働き方ができ、結婚や子育てに関する希望の実現などに向けて、暮らしの経済的基盤が確保できる。

(行動指針に掲げる目標(代表例))

就業率(、 にも関連)
< 女性(25～44歳) >
現状 64.9% 2017年 69～72%
< 高齢者(60～64歳) >
現状 52.6% 2017年 60～61%

フリーターの数
現状 187万人 2017年
144.7万人以下

健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会

働く人々の健康が保持され、家族・友人などとの充実した時間、自己啓発や地域活動への参加のための時間などを持てる豊かな生活ができる。

(行動指針に掲げる目標(代表例))

週労働時間60時間以上の雇用者の割合
現状 10.8% 2017年 半減
年次有給休暇取得率
現状 46.6% 2017年 完全取得

多様な働き方・生き方が選択できる社会

性や年齢などにかかわらず、誰もが自らの意欲と能力を持って様々な働き方や生き方に挑戦できる機会が提供されており、子育てや親の介護が必要な時期など個人の置かれた状況に応じて多様で柔軟な働き方が選択でき、しかも公正な処遇が確保されている。

(行動指針に掲げる目標(代表例))

第1子出産前後の女性の継続就業率
現状 38.0% 2017年 55%
育児休業取得率
(女性) 現状 72.3% 2017年 80%
(男性) 現状 0.50% 2017年 10%
男性の育児・家事時間(6歳未満児のいる家庭)
現状 60分/日 2017年 2.5時間/日

関係者が果たすべき役割

企業と働く者

個々の企業の実情に合った効果的な進め方を労使で話し合い、自主的に取り組んでいくことが基本

〈行動指針に掲げる具体的な取組〉

(総論)

経営トップのリーダーシップの発揮による職場風土改革のための意識改革、柔軟な働き方の実現等

目標策定、計画的取組、点検の仕組、着実な実行

労使で働き方を見直し、業務の見直し等により、時間当たり生産性を向上

(就労による経済的自立)

人物本位による正当な評価に基づく採用の推進

就業形態に関わらない公正な処遇等

(健康で豊かな生活のための時間の確保)

労働時間関連法令の遵守の徹底

労使による長時間労働の抑制等のための労働時間等の設定改善のための業務見直しや要員確保の推進

(多様な働き方の選択)

育児・介護休業、短時間勤務、短時間正社員制度、テレワーク、在宅就業など個人の置かれた状況に応じた柔軟な働き方を支える制度整備と利用しやすい職場風土づくりの推進

女性や高齢者等への再就職・継続就業機会の提供

国・地方自治体

我が国の社会を持続可能で確かなものとするに関わることから、国と地方公共団体も、企業や働く者、国民の取組を積極的に支援するとともに、多様な働き方に対応した子育て支援や介護などのための社会的基盤づくりを積極的に実施

〈行動指針に掲げる具体的な取組〉

(総論)

実現に向けた枠組みづくり

- ・国民運動の展開(政労使合意・地域の実情に応じた展開)
- ・制度的枠組の構築(企業の次世代育成支援の取組促進、働き方に中立的な税・社会保障制度の検討)
- ・取組企業への支援、社会的評価(企業情報の収集・提供、中小企業への支援、顕彰制度等)

関係法令の周知と遵守のための監督指導の強化

(就労による経済的自立)

若年者等の経済的自立の支援

(健康で豊かな生活のための時間の確保)

労使による長時間労働の抑制等のための労働時間等の設定改善のための取組の支援

(多様な働き方の選択)

保育サービスの充実等の多様な働き方に対応した子育て支援の推進、地域で育児・介護等を行う家族を支える社会的基盤の形成

進捗状況の点検・評価

「仕事と生活の調和」実現度指標等の活用により、全体としての進捗状況を把握・評価し、政策へ反映
憲章、行動指針の点検・評価を行うため、学識経験者、労使の代表で構成される検討の場を設置